

主体 美術

SHUTAI-BIYUTSU

主体美術協会は、1964年に結成されました。
私達は作家一人一人が創作を自由に発表出来る場を確保し、美術家の
集団として積極的に活動していきたいと思います。
私達は世界的な視野に立って、豊かな人間性を培いつつ、現実の日本
に深く根を下ろした生新な芸術を創造していくことを期しております。

発行：主体美術協会事務局
〒302-0001
茨城県取手市小文間4401-1
福田玲子方 TEL / FAX 0297(85)6665



小林宏至 「Portrait」
(キャンバスボードに鉛筆)

2018.8 No.103

CONTENTS

- 1p 卷頭言 ……有馬 久二
2~5p 特集 会員アンケート
夢のコレクション
「私の欲しい絵」
6p 研究部よりお知らせ
第54回主体展 研究講演会
石内 都氏 講演
「不在の身体・
存在する衣・今」

第54回主体展
アーティストトークのお知らせ

ART WAVE

- 7p 「生誕100年 森川ユキエ」
三条市歴史民俗産業資料館
2018年6月19日(火)～7月29日(日)

- 8・9p ●アトリエ訪問
「坂本 勇」アトリエを訪ねて
前田 博
10p ●各地の美術展から
福田加奈子(福岡県)
●フォトエッセイ
渡辺良一(北海道)
11p ●「私と主体美術」
石田 悅子(山梨県)
佐藤 一男(秋田県)
12p インフォメーション
展覧会記録
2018年第54回主体展日程
編集後記・その他

主体展に出品して四十有余年

有馬 久二

平成の元号ももうすぐ終わり順調に次元号を迎えることができれば、私は“三元号”生きたことになる。昭和44年にディスプレイ会社に就職した。大阪万博の年で、駆け出しの新米でも即戦力を要求される時代。毎日徹夜の連続、体力が持たず数年で挫折した。

27歳ごろ初めて描いた20号の油絵2点を、たまたま公募していた主体展に出品した。旧美術館の地下での展示だったけれど、鼻の穴が膨らむような高揚感があった。恥ずかしながら何の信念主義主張もなくただ居心地の良さに、以来それから毎年出品した。大野五郎氏がハ王子高尾に転居してきて、それからは中央線沿線の主体出品者や会員と親しく交流するようになり、酒も少しばかり飲めるようになった。その頃は沿線に多くの出品者・会員がいた(因みに私、有馬はJR中央線国立市在住)。

40歳を過ぎていた頃、既に鬼籍に入っている某会員A氏に「有馬君！すまないけど車で“どこどこ”に連れて行ってくれないか?」と頼まれた。“どこどこ”が何処だったかは覚えていない。聞けばA氏の友人が入院していて見舞いに行きたいとのこと。

病室に入るとA氏の友人は、無精ひげの青白い痩せた顔でスケッチブックを抱えて寝ていた。あの時のA氏の友人は何歳だったのか? 今から思うと50歳をちょっと過ぎたくらいか、自分と10歳位しか違わない年齢だったようだ。見舞いに行ってから数日後に訃報を聞いた。あれから30年にはなるだろう、何かにつけてあの無精ひげの青白い痩せた顔の黄色い目が、怠惰な私を叱咤するように脳裏をよぎる。死に臨んでまで離さなかったスケッ

チブックに何を描こうとしていたのだろうか、描けなくなつた歯痒さを摺り込もうとしていたのか。ワイエスを思わず精神性の高い写実作品を数点揮見したことがあるが、残念ながら名前の記憶が無い。

初めて20号の絵を抱え搬入会場まで行った時のあの熱気ある雰囲気は今も忘れることが出来ない。創立会員の面々が搬入受付台の向こうにすらりと椅子に腰を据え、談笑の声が天井に響き、受付番号を大声で呼びキャンバスに揮毫する人、傍らでは持ってきた大作を木枠に張る人、額縁を付ける人、部屋の隅には前週会期画展の捨ててある木枠等(当時は車での搬入代行業者もいなかつたので、絵を丸めて電車で運ぶ人もいた)、昭和の高度成長の韻音と重なり熱気に溢れていた。

人口の減少は社会の深刻な問題であるが絵画界にとっても深刻だ。IT機器の進歩で手軽に簡単に自分を表現でき瞬時に発表できる今、とりわけ公募団体は危機的状況ではないかと思う。と云って、自分にはどうしていいか分からぬ。人口の高齢化と減少はずつと昔から分かっていたはずなのに、政治の無策!!と叫んでも詮無い。世はデジタル化の時代、テレビ・映画・ゲーム等、嘘と真実との境が曖昧な昨今、絵画制作は究極のアナログ作業、対象物もしくは自身の心と向き合って会話し、そこから発するメッセージを受け止め、それをキャンバスに表現できた時の満足感・達成感は何物にも代えがたい、とは云うもののその高みは陽炎のように浮遊し、手が届きかけたらするりと逃げる。だから絵は面白い。



夢のコレクション 「私の欲しい絵」

昔から憧れだったあの画家のあの作品。もし買えるものなら買って独り占めしたい絵。美術館所蔵の名作から個人蔵のものまで、現実的なことはさておき手に入れられるとしたら…。

そんな「私の欲しい絵」を会員諸氏に答えていただきました。



藤田俊哉
【作品名】「燕子花図屏風」
【作者名】尾形光琳
【所蔵先】根津美術館
箱根のとある場所にある別荘。庭に面した数寄屋造りの和室で、この絵を眺めながらひとり酒を呑みたい。

長沢晋一
【作品名】1959年～1965年の油彩画
【作者名】山口長男
【所蔵先】
よく行くお店の壁に常時掛かっていて、会いたい時にいつでも会える事が出来れば最高です。

榎本香菜子
【作品名】「受胎告知」
【作者名】フラ・アンジェリコ
【所蔵先】サン・マルコ修道院
自分が描きたい絵と飾っていたい絵とは違う。洗面所の壁に複製画を貼り、毎朝見つめながら歯を磨く毎日。

有馬久二
【作品名】「裸婦」
【作者名】原撫松
【所蔵先】東京藝術大学大学美術館
約20年前、神奈川県立美術館で見た原撫松展。明治にこんな画家がいたのか!!と云う驚きと感嘆の作品。

藤田富治郎
【作品名】「花子誕生」
【作者名】山口薰
【所蔵先】群馬県立近代美術館
この絵は自分の原点と思う。牛の親子を通して普遍的な愛情を充分な完成度を備えて表現している。

根本章平
【作品名】「悪女フリー」
【作者名】ブリューゲル
【所蔵先】マイヤー・ファン・デン・ベルク美術館
この絵には、無限に近い言葉が隠されていて、それは国や歴史を超えていくつの解釈を与えてくれる。

中嶋修
【作品名】「恐竜ガーティ」
【作者名】ウインザー・マッケイ
【所蔵先】オハイオ州立大学ビリーアイルランド漫画図書館博物館
1913年、6分20秒の動画原画6千枚。この興行成功がなければ、現在のアニメーションは何もなかった。

黒川洋
【作品名】「金魚」
【作者名】アンリ・マティス
【所蔵先】ブーシキン美術館
小3の時に西洋美術館で見て、「絵って素晴らしい！」と脳に刷り込まれた、私にとって原点ともいえる作品です。

若山保夫
【作品名】ジャコメッティの作品
【作者名】ジャコメッティ

岩井啓二
【作品名】法隆寺金堂壁画・内陣小壁飛天14号
【作者名】不明
【所蔵先】法隆寺金堂
法隆寺金堂壁画は、昭和24年焼損しましたが、内陣小壁の飛天は残り、中でも14号が一番好きです。

布施雅子
【作品名】「バベルの塔」
【作者名】ブリューゲル
【所蔵先】ボイスマン美術館
己に対する戒めだが、絵画的に求めるものとして無限の広がり、宇宙、仏教的精神(曼陀羅)と私なりの解釈をしている。

田中和枝
【作品名】「バルザック像」
【作者名】オーギュスト・ロダン
【所蔵先】国立西洋美術館、MOMA、パリ路上
初めて見たときから魅了された。運命か、予期しない時に度々出会いがあり、買えるものか調べたこともある。

小菅光夫
【作品名】「自画像」
【作者名】レンブラント
【所蔵先】マウリツ・ハイス美術館(ハーグ)
学生時代にレンブラント展で最晩年の自画像を見て涙がこぼれた。あの感動は白髪になった今も忘れない。

矢野利隆
【作品名】「石版画集《エドガー・ポーに》『夢のかで』他」
【作者名】オディロン・ルドン
【所蔵先】
黒色の中にルドンの幻想と、秘められた色彩の輝きがすべて表現されているように思えてこれを選びました。

荒木道之
【作品名】「目のある風景」
【作者名】観光
【所蔵先】国立近代美術館
若いときに出会った作品で寺田政明、井上長三郎の両先生から教えられた。不思議な世界の作品。





森伊津子

【作品名】「ぶらんこ」

【作者名】フラゴナール

【所蔵先】ウォレス・コレクション

小学校の図書室で世界名画全集を見るのが好きでした。大人になって印象は変わりましたが、やはり大好きです。

柴田かよ子

【作品名】全ての作品

【作者名】マーク・ロスコ

【所蔵先】

簡潔な画面と色彩のハーモニーに魅かれます。強い精神性を感じる。

前田博

【作品名】「花子誕生」

【作者名】山口薰

【所蔵先】群馬県立近代美術館

「モダンアートの旗手たち」2002年、豊科近代美術館の展覧会で拝見。色彩の調和が素晴らしい感動しました。

坂本勇

【作品名】「食卓の一隅」

【作者名】ボナール

【所蔵先】パリ・国立近代美術館

赤と朱と黄色の暖かい色彩で描かれたもの。ごく日常の食卓の一部を切り取りながら、非日常の新しい空間が美しい。

阿部正彦

【作品名】「牛乳列車」

【作者名】国吉康雄

【所蔵先】

国吉康雄氏の画業に敬虔の念を抱く一人です。氏の言葉に「偉大な芸術とは、ヒューマニティそのもの」とある。

佐野未知

【作品名】「受難」

【作者名】ルオー

【所蔵先】

40数年前、ルオーの絵の前で立ちすくんだ。キリストの深い愛と精神性があり、この絵の中に教会が浮かんだ。

種倉紀昭

【作品名】「薔(あざみ)を持つ自画像」

【作者名】アルブレヒト・デューラー

【所蔵先】パリ・ルーブル美術館

夢の中で制作の参考にと入手し、国際手配の逃亡中、飽かずには眺む。羊皮紙にテンペラで軽いが、後悔頻り気重。

中城芳裕

【作品名】「キュクロプス」

【作者名】オディロン・ルドルン

【所蔵先】クレラー・ミュラー美術館

優しさやユーモアはタフな心の現れだ、と信じさせてくれます。70歳を越えた画家の心境にも思いを馳せます。

宮林さわ子

【作品名】「空間のうねり」

【作者名】イサム・ノグチ

【所蔵先】イサム・ノグチ庭園美術館

東洋と西洋の二つの異質な文化の間で体験し、振れ動きながら制作された立体作品。私の絵画にもそのスケールの大きさと強さがほしい。

長澤弘美

【作品名】「晩鐘」

【作者名】ジャン・フランソワ・ミレー

【所蔵先】オルセー美術館(パリ)

中学で見に行ったミレー展が私の制作の原点になった。中でも晩鐘はベッド脇に飾って、毎晩一緒に祈りたい。

福田玲子

【作品名】「サンピエトロのピエタ」

【作者名】ミケランジェロ・ブオナローティ

【所蔵先】バチカン・サンピエトロ大聖堂

ほの暗いバシリカの中で初めてこの彫刻像を見た時、慈愛に満ち満ちた輝きを放つ美しさに釘付けになった。

渡辺良一

【作品名】「新しい天使」

【作者名】パウル・クレー

【所蔵先】

自室に飾られた「新しい天使」を背に、ソファーにモタレ「歴史の概念について」を読む私の夢想。

島田邦麿

【作品名】「サント・ヴィクトワール山」

【作者名】ポール・セザンヌ

【所蔵先】ユートールド・インスティテュート・ギャラリー

この絵が私の居間にあったら、大自然の息吹きと雄大な広がりが部屋の空間を満たしてくれるに違いない。

返町勝治

【作品名】「頭」

【作者名】カール・コーラップ

【所蔵先】個人蔵

「種村季弘の眼～迷宮の美術家たち～展」に並んだ本作は逸品。謎めいた空間と乾いた硬質な寂寥感が魅惑的。

佐々木満

【作品名】「デルフト眺望」

【作者名】フェルメール

【所蔵先】マウリッツハイス美術館(オランダ)

憧れるが欲しくはありません。個人蔵でなく、多くの人に見て貰いたいからです。

賀川忠

【作品名】「二人」

【作者名】森芳雄

【所蔵先】紀伊国屋画廊

初個展で森先生に「売る絵は描くな」と云われ、主催6回で会員、審査をしながら絵の沢山の考え方を教った。

中川奈哥子

【作品名】「サモトラケのニケ」

【作者名】不詳

【所蔵先】ルーブル美術館

中学の美術の教科書で一目惚れ。いつか実物に会いたいと、30年。4年前ルーブルへ行ったら貸出中でガックリ!!

木村正恒

【作品名】「ニコロ・ロランの聖母子」

【作者名】ヤン・ファン・エイク

【所蔵先】ルーブル美術館

電子顕微鏡的な緻密さ! ユマイユ状の重厚、透明、陶酔的な画面、神が成した如くである。



保坂淳

【作品名】「LES MOUETTES 1955」

【作者名】NIKOLAS DE STAEL

【所蔵先】Collection Paris

簡潔なフォルムとリズミカルな色彩、日常と非日常で生きている作者の魂の響きを感じます。



永井美智子

【作品名】「夢(Le Reve)」

【作者名】アンリ・マティス

【所蔵先】個人蔵

2004年9月10日、国立西洋美術館にてマティス展が開催されました。主体展と重なり、実物が見られ幸せでした。



片岡美鈴

【作品名】「風」

【作者名】香月泰男

【所蔵先】東京芸術大学

大胆な構図の中に裸の後姿の少年・深いブルーの空そして一瞬の風、見るたび、絵に取り込まれてしまう。

大友恵子

【作品名】「眠るジプシー女」

【作者名】アンリ・ルソー

【所蔵先】ニューヨーク近代美術館

砂漠に眠るジプシー女とライオン。不思議で恐くて優しくて美しくて、いくつになんでもときどき惹かれます。

水戸麻記子

【作品名】「観音」

【作者名】古賀春江

【所蔵先】東京国立近代美術館

仏教徒ではないが仏教美術に惹かれ、バスでパキスタンに行ったほどである。できるものなら、本物を見ながら模写してみたい。

井上樹里

【作品名】「香月家台所壁画」

【作者名】香月泰男

【所蔵先】香月泰男美術館

シベリヤシリーズや母子像も捨て難いですが、もし自宅の食堂に飾れるなら何が何でも欲しいです。日々好日。

森脇ヒデ

【作品名】「白い絵」

【作者名】坂本善三

【所蔵先】サン・マルコ修道院

達觀した気持ちで今だからこそ身近に欲しい坂本善三のモノクロームの世界です。

栗崎進一

【作品名】「浜」

【作者名】牛島憲之

【所蔵先】熊本県立美術館

我が国の現代風景を描きながら土着的な叙情、日本人が持つ情感を表現した心象風景。

福田加奈子

【作品名】「蠟燭」

【作者名】高島野十郎

【所蔵先】久留米市美術館、他

「蠟燭」はまだ好きな絵というだけ。でも、イコール欲しい絵なのかな。

佐藤善勇

【作品名】「ジャガイモを食べる人々」

【作者名】ゴッホ

【所蔵先】ゴッホ美術館

戦後疎開した農家の夕食は薄暗い居間。物がなく貧乏でも戦争が終った安堵感。裏の小川で遊んだ遠い記憶も蘇る。

小林宏至

【作品名】「廃兵」

【作者名】鴨居玲

【所蔵先】笠間日動美術館

私が一番最初に好きになった作家で、今も変わらず大好きです。

岡本裕介

【作品名】「桜図(国宝)」

【作者名】長谷川等伯

【所蔵先】真言宗智山派総本山智積院

こんな物パクって保管どないしますのや!! 収蔵する場所考える事が先やと思ひます。その方が建設的考え方や!!

渡邊俊行

【作品名】「太子樹下禪那」

【作者名】村上華岳

【所蔵先】ボイスマン美術館

華岳は「制作は密室の祈りである」と言葉を残した。画業は目的でなく世界の真理に達する修行であると。私にとっては麻薬のような言葉であり作品だ。

前川アキ

【作品名】「多くの川を渡り 再び森の中へ」

【作者名】若林奮

【所蔵先】MIHO MUSEUM

若林奮氏のドローイングがどれも大好きです。この18点組の大作は、毎日でも暫く眺めたいと思う作品です。

石井晴子

【作品名】「眠れる女」

【作者名】藤田嗣治

【所蔵先】秋田県立美術館(平野美術財団)

横たわる陶器のような白い膚の女性の前に猫、マットな黒の背景に魅せられ、帰省の度に足しげく通っています。

中村陽子

【作品名】「睡蓮」

【作者名】クロード・モネ

【所蔵先】オランジュリー美術館

モネの睡蓮など大好きで、皆でいつでも楽しめたら最高です。

山本靖久

【作品名】「Mural Section 1」

【作者名】MARK ROTHKO

【所蔵先】DIC川村記念美術館

ニーチェの思想を背景とし、人間の空虚感を和らげる精神性の高いその画面は、神秘性に満ち溢れています。



豊福光行

【作品名】「人質」

【作者名】ジャン・フォートリエ

【所蔵先】

深い悲しみの中で絵画の本質に迫っている。マチールが素晴らしい。



桑原雄一

【作品名】「鳳凰図(東町祭屋台 天井画)」

【作者名】葛飾北斎

【所蔵先】北斎館(小布施)

1点を決めるのは大変。迷った画家は次の通り。
河鍋暁斎、伊藤若冲、深井克美、牧野邦夫、バスキン等々。

加藤嘉巳

【作品名】「孫」

【作者名】安井曾太郎

【所蔵先】大原美術館

中学校の教科書に載っていた安井曾太郎の「孫」の油絵が心に残っており、その後美術館で本物を見て感動した。

續橋 守

【作品名】「赤いチョッキの少年」

【作者名】セザンヌ

【所蔵先】ビュールレ美術館(チューリッヒ)

右腕が極端に細長いことで有名な作品。2008年に盗難にあったが4年後無事に戻った。犯人の目的は…?

見藤瞬治

【作品名】「ラスコー洞窟の壁画」

【作者名】旧石器時代後期クロマニヨン人

【所蔵先】フランス西南部ヴェゼール渓谷

中学生の頃、その絵は私の前に現れた。ある本の小さな写真で、油彩でも、水彩でも、日本画でも無かつた。

林 哲生

【作品名】「善政の寓意」

【作者名】アンブロージオ・ロレンツエッティ

【所蔵先】シエナ市役所

ぼんやりニュースを見ていたら、ふとこの絵を思い出しました。

丸谷 恵

【作品名】「月とミジンコ」

【作者名】中島佳子

【所蔵先】第45回主体展出品作

たゆたう命の水の揺りかご、生命の循環の神秘を具現化された作品に感動しました。せめてもう一度会いたい。

松元美奈子

【作品名】「Zim Zum. 1990」

【作者名】Anselm Kiefer

【所蔵先】National Gallery, Washington

美術館で出会い、圧倒されました。大きさ、表現の自在さ、すべて越えていました。あの絵の存在が喜びです。

山田礼二

【作品名】「黄土地帯」

【作者名】森芳雄

【所蔵先】門田正子氏蔵

昨日展示された作品で、看守として長時間対面していて、自宅にこの作品が掛けられているところを想像してしまった。

浅野 修

【作品名】「巨大じゃがいもアート」

【作者名】世界の子供

【所蔵先】巨大じゃがいもアート館他所蔵

世界の子供アート生きる魂どれもアッ!! 深い

畠 理弘

【作品名】「サバーサ・ガルシヤの肖像」

【作者名】ゴヤ

【所蔵先】ワシントン・ナショナルギャラリー

海は魔力で不思議だ。鯨もサメ、亀も棲む、ウツボが側に寄る恐怖もある。そんな神秘的な絵を描きたいのだが…

森 慎司

【作品名】無し

憧れる、見続けていたい絵はあっても、所有したいかといえば、かなり怪しい。

石田俊哉

【作品名】「焼き栗」

【作者名】ANDREW WYETH

【所蔵先】プランディワイン・リヴァー美術館

アイゼンハワーが気に入り、ホワイトハウスに飾っていたらしい。自分もこの作品を玄関に飾りたい。

藤原アツ

【作品名】「雪まじりの風」

【作者名】アンドリュー・ワイエス

【所蔵先】ワシントン・ナショナルギャラリー

丘の向こうには何があるのか…? メーン州の農場近くの丘。物語性を感じるこの作品に強く惹かれる。

結城智子

【作品名】「快樂の園」

【作者名】ヒエロニムス・ボス

【所蔵先】ブラド美術館

筆舌に尽くし難い普遍的傑作。ほとんど神の領域。描かれたすべてのモチーフ、ディティールとにかく大好き。

齋藤典久

【作品名】「かささぎ」

【作者名】クロード・モネ

【所蔵先】オルセー美術館

かささぎと言う題名の雪景色。雪の白色を光と色彩によって表現している。それは穏やかな発光体の様である。

吉田 正

【作品名】「巻き毛髪の少女」

【作者名】モディリアーニ

【所蔵先】個人蔵

モデルの人柄が滲み出していく、絵画的造形も強く、どこか日本的にも感じる。いつかこんな人物画を描きたい。



アンケートにご協力いただき、ありがとうございました。こうやって改めて並べてみると、その方の作風と同じような傾向の絵もあり、かたや思ってもみない絵だったりして、非常に興味深い結果でした。聞いたことのない作家、作品があったら、さっそくネットで検索するか、図書館で調べてみてください。そして、普段こういう会話がなかなかできない遠方の会員とのコミュニケーションに、話題のひとつとして役立てていただければありがとうございます。(機関紙担当 山田)

第54回主体展 研究講演会 2018

石内 都氏 講演 「不在の身体・存在する衣・今」

■9月2日(日)14:00~15:00

(フリーダ・カーロの遺品撮影の映像15分含む)

■東京都美術館講堂(入場無料)

“目の前にある世界をしきりつかみ、慈しみ、愛でる心の持ち主が、写真を撮る人である”(「写真関係」石内都/筑摩書房)このキッパリとした言葉通りに、石内都氏の仕事は、年を重ねるごとに美しく、普遍的な深さを増しています。写真界のノーベル賞ともいえるハッセルブラッド国際写真賞を受賞し、今や世界中から注目されている写真家です。是非とも、この貴重な機会をお見逃しなくご参加下さい。

石内都氏の講演会を前に

研究部 榎本香菜子

水の合わない空間というものがあり、自動車教習所はあるで苦役を強いられているような場だった。司修さんは車のキーを投げつけ立ち去り、合田佐和子さんは「運転しない方がいい」と教官に拒否され止めたと聞く。そんな教習所で交通法規を教えて下さった初老教官は半端ではない乗り物好きで、あらゆるライセンスを所得し嬉々としてテキスト以外のことも熱く語った。サイドカー付ハーレーダビッドソンで走り抜けていく姿を偶然見かけたときにはオー! カッコイイと思ったものだ。どんな職種であれ、一つのものに尋常でない情熱を注ぎ語る話は面白く、説得力がある。そして学ぶことが多い。10年あまり研究部として講演企画をやらせていただいているが、有名無名に関係なく私の人選の基本はまずその点にある。

5月12日、安曇野ちひろ美術館での石内都氏のトークイベントに参加し、講演会の打ち合わせをした。(主体との) “何の接点も無いじゃない”、と言われてしまった。確かに油絵の公募団体が写真家の講演会をやるというのは表面的には畳違いで、接点はない。しかし同じ表現というものにかけ生きている者として、強いメッセージ(受け手が自由に感じ取るものではある)を世界に送り続け今という時代を果敢に生き抜いているアーティストの生の声を聴きたい。技や情報は自分の仕事に即して自分で仕込むもの。鋭い感性と対象への深い愛、生と死という本質から外れることのない視線、そして自分の作品をどう発信するか、会場に応じて厳しい目。様々な国、様々な世代の人を見入る石内都氏の写真の強さ。講演会を引き受けて下さったことに心より感謝しつつ、受け手である私たちは敬意を持って耳を傾け、日々の制作の力、闘志を得て欲しいと切に願っている。

5月13日 安曇野から戻った日に



©Maki Ishii

石内 都氏 略歴

1947年	群馬県桐生市生まれ。神奈川県横須賀市で育つ。
1979年	『Apartment』で第4回木村伊兵衛写真賞を受賞。
2005年	母親の遺品を撮影した『Mother's』で第51回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館代表作家。
2007年~	被爆者の遺品を撮影した『ひろしま』を発表。(~現在まで)
2009年	第50回毎日芸術賞受賞。
2013年	紫綬褒章受章。同年フリーダ・カーロの遺品を撮影した『Frida by Ishiuchi』をメキシコ、RMより出版。
2014年	ハッセルブラッド国際写真賞を受賞。
2015年	ロサンゼルス J・ポール・ゲティ美術館、「横須賀」から『ひろしま』まで個展『Postwar Shadows』。
2016年	『幼き衣へ』『Frida is』個展、「フリーダ 愛と痛み」「写真関係」を出版
2017年	「肌理と写真」横浜美術館。
2018年5月	「いわさきちひろ生誕100年『Life』展」ひろしま石内都」を安曇野ちひろ美術館にて開催。

作品は、東京国立近代美術館、東京都写真美術館、横浜美術館など国内主要美術館、ニューヨーク近代美術館、J・ポール・ゲティ美術館、テート・モダンなど世界各地の美術館に収蔵されている。

主体展会場での会員によるトーキイベントです。現在の会員作家の仕事、その表現をよりわかりやすく鑑賞者にも紹介したいという趣旨です。今年も会期中2回に分けて行います。トークはひとり15分、その場で来場者との簡単な質疑応答もします。その後は時間の許す範囲で会員・出品者相互の会場研究へと移ります。ふるってご参加ください。

**9月1日(土)
14:00~15:30
主体展会場**

●担当会員
伊藤博昭
オノ・ミチ・ヒロ
種倉紀昭
前川アキ
(五十音順)トーク順は未定

**9月9日(日)
14:00~15:30
主体展会場**

●担当会員
小菅光夫
新島知夏
原田文子
(五十音順)トーク順は未定

第54回主体展

アーティスト・トーク ▶ 会場研究会



▲53回展でのアーティスト・トーク

このコーナーでは、会員・出品者の様々な活動報告や、独自の目線から綴られたエッセイ、紀行文、美術展評などなど多種多様な寄稿を紹介していきます。

- 「生誕100年 森川ユキエ」
- アトリエ訪問／「坂本 勇」アトリエを訪ねて
- 各地の美術展から／福田加奈子(福岡県)
- フォトエッセイ／渡辺良一(北海道)
- 私と主体美術／佐藤一男(秋田県)・石田悦子(山梨県)

「生誕100年 森川ユキエ」

三条市歴史民俗産業資料館

2018年6月19日(火)～7月29日(日)

今年は、故森川ユキエ氏の生誕100年という節目の年にあたります。主体美術協会の創立会員でもあり、本誌94号でも「礎の作家」として紹介しています。これに合わせて出身地である新潟県三条市では、森川氏の画業を紹介する展覧会を開催しました。今号では、同郷の会員である筑波進氏が、2010年の森川ユキエ遺作展の際、新潟新報に寄稿した文章と、親交の深かった續橋氏の寄稿も掲載します。



Morikawa Yukie
1918年—2009年

森川ユキエ遺作展／文久堂ギャラリー(新潟市中央区)
2010年6月14日付 新潟日報文化欄

戦中・戦後の混乱期を不器用に、しかし、しっかりと自分の生き方の哲学を守り抜いて一昨年の夏、91歳の生涯を静かに終えた画家森川ユキエの遺作展が故郷新潟で開催されている。「90歳で最後の個展を」と強い思いを持ち続けた画家の志を実現した有志の方々に敬意を表したい。

新潟市美術館での10年前の大規模な個展から2回目で、最後の里帰り展になった。筆者が森川さんと最後に言葉を交わしたのは一昨年の主体展審査会場で、車椅子ではあったがいつものように飘々として元気だった。若いころ、鎌倉のお宅を訪問した。屋敷に背丈ほども雑草が茂り、古風な和室には着物を羽織らせたモデル(座布団)が鎮座していて、不気味さを漂わせていた。その時、この生活の雰囲気がそのまま森川さんだと感じたことを覚えている。シユールなだけでもなく幻想絵画とも異なる不思議さは森川イズムとも言うべきか。常に生活空間にテーマを求め、大の人好きだったが、絵はあるで対話を拒んでいるように見える。抜け殻の紋付きや白足袋、空の練炭袋は、異質な状況に置かれながら現実感を主張し、虚しさと同時にそこにはついたはずの「固体」への想像をかき立てる。また「うらおもて」は人間社会の醜醜を風刺し、後期のマネキンシリーズは心の交流が途絶えた現在社会の寂しさを訴える。

画家森川ユキエの初期から最晩年までの約50点が並び、彼女の生きざまそのものの世界に浸ることができる。(筑波進・主体美術協会会員)



2010年第46回主体展
遺作出品
「太鼓橋」F100

森川ユキエさんのこと

森川さんと一緒の一枚の写真がある。23年も前のものでスケッチにお連れした足尾銅山の製錬所の橋の上である。どういうわけか私が描いている足尾に興味を持たれたようで、出品者の藤茂さんも同行しての一泊の旅だった。廃鉱となった工場跡は非常に危険なのでいつも立ち入り禁止の筈だが、その時は偶然に入口の門が開いていた。知らんぷりしてそっと入りこみ、今にも崩れ落ちそうな建物内で何枚かスケッチした。この取材によって森川さんはどのように作品化するのかと密かに楽しみにしていたが、翌年の主体神奈川展に古いタンクとマネキンを組み合わせた不思議な異空間の小品を出品された。さすがだと思った。

マネキンといえば、1999年の12月から翌年にかけて新潟市美術館で開催された「妖かしの無言劇場」と題した大規模個展では、実物のマネキン人形が会場中央に数体配置されていて、大変驚いたものである。

早いもので森川さんが亡くなられて丁度9年。この度、生れ故郷の三条市で生誕100年の企画展が開催されているとのこと、特に地元の人たちにとって個性豊かな幻想の世界を生涯かけて追求した女性画家の存在を改めて認識する貴重な機会になるだろう。

さてここで森川さんの思い出話を少し紹介したい。森川さんは何かにつけてよく電話を下さるのだが、ある時鴨鍋の材料を沢山もらったものの一人では食べ切れないで手伝ってほしいとの電話がきた。急遽我が家で鴨鍋パーティーをやることになり、家内が大急ぎで二宮から電車

續橋 守

とバスを乗り継いで鎌倉のお宅まで迎えに行った。ニコニコ顔の森川さんと食欲旺盛の息子たちを交えての楽しい宴会になったことはいうまでもない。

また森川さん晩年の頃だが、足の裏を火傷して歩行困難になったとの電話があった。何でも庭先のサンダルが日光で高熱になっていたのに気付かず、素足で履いてしまったとのこと。早速、家内は柔らかい厚布でできた真っ赤なドイツ製のスリッパを抱えて見舞いに行つたが、暫くの間森川さんはとても苦労されていたようである。

2009年の中頃、森川さんが倒れて入院し意識も遠くなったとの報せがあり、鎌倉の病院を訪ねた。静かに眠ったままだったので、短い手紙を枕元に置いて帰ってきた。

主体で出会ってからの森川さんの様々なことを今懐かしく思い返している。



足尾銅山の前で。
右端が森川さん

アトリエ訪問 vol.2

「坂本 勇」アトリエを訪ねて

前田 博

聞き手／前田 博

2018年5月13日(日)、長野県伊那市の坂本勇氏のアトリエを訪ねた。今年は暑さが例年以上に早く来ているようだ。信州は昼は暑くても夜はひんやりとしてくるのでなんとかやっているのだが…。さて私は長年、同郷の主体会員仲間である坂本さんだが、この機会にあらためて絵についてお聞きした。



■坂本さんのこれまでについて、略歴をお教え下さい。

坂本：昭和19年11月に名古屋で生まれました。空襲っ子と言われ、戦火が日に日に強くなり駒ヶ根市に疎開、生活のために開拓地に入植、生活の苦しいなか父親がどこかの公募展のために絵を描いていたことを、おぼろげながら覚えています。すぐにやめたようですが。公募展に初めて出品したのは高校2年の時、その後は地元の公募展・グループ展で活動を続け、主体展は昭和53年初出品、63年に会員になりました。平成7年に会社を辞め絵画教室を開き、油彩画、パステル画、絵手紙を指導するようになり、絵手紙教室はその後のブームに乗って人気が出ました。以後、地元の美術会にも関わりながら主体展、個展での発表を続けています。

■普段の制作に関する事をお聞かせください。作品のモチーフやテーマは何ですか。

坂本：身近にある自然から受けた感動を中心に、そこに住んでいる人にしか表現できないものを描いています。田畑、林、草花など、季節は中秋から早春までが多く、冬の寒さが中心になっています。秋は束の間の温もり、春を待つ心情、芽吹きの喜び、などがテーマです。

■作品づくりの手法、材料のこだわりを教えて下さい。

坂本：キャンバスに油彩です。微妙な空気感を出すために大荒目のキャンバスを使い、ローラーを使用することが多い。マチエールと色は岩絵具が肌に会うため、工夫をしながら使い始めています。小品はメインの画材はパステルですが、パステルの良さを生かしながら油彩画に負けない強さを出すよう心掛けっています。

■何を大切に作品づくりをしていますか。

坂本：形を描くが、形の奥にあるもの、形以上のものが出来るまで描くということをモットーにしています。

■絵を描くようになったのはいつ頃、またきっかけは何ですか。

坂本：高校で美術部に入り、当時独立展に出品していた美術部顧問の先生の後ろ姿に惹かれ、2年生の時、県展に入選してから公募展を意識するようになりました。

■好きな画家にはどんな方がおりますか。

坂本：ボナールの色彩と明暗のバランス感覚。シャガールの大きな空間表現。森芳雄、山口薰、脇田和らの作品から伝わる温もりなど、いずれの作家も自分の作風とはかけ離れていますが好きな作家です。又、地元出身の日本画家・滝沢具幸の自然を見つめる感覚にも共感を覚えます。

■師事した先生、影響を受けた画家、尊敬できる画家を具体的に挙げてください。

坂本：高校の美術の安川博先生(現パリ在住)は絵の道に入るきっかけとなった人。主体の吉江新二先生には主体展に出品するきっかけとなる抽象画と地元で出会えたこと、またどこにいても鉛筆とスケッチブックは手放さない姿勢、どう生きるかという問題と常に向き合っている姿勢など、生き方を指導されました。

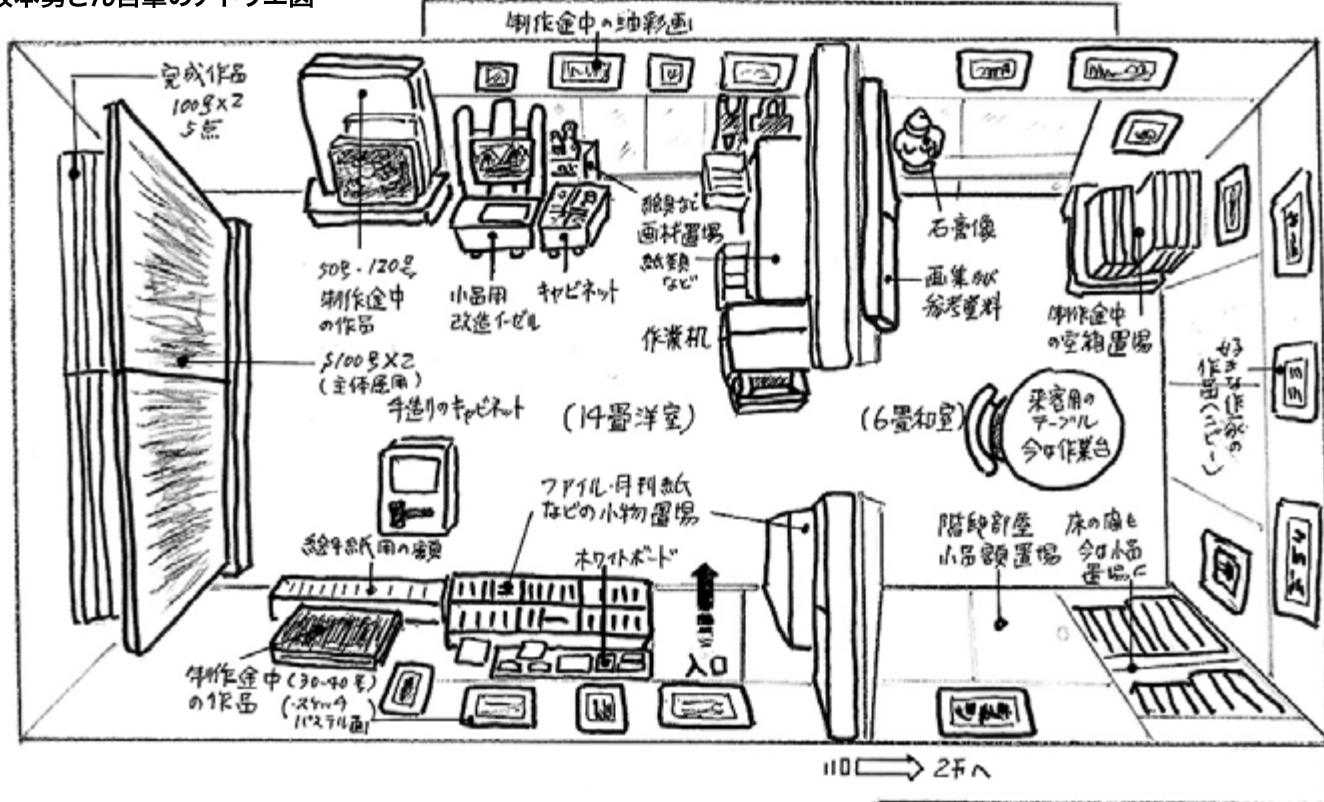
■絵を描く上で「好きな言葉」はありますか。

坂本：『これ以上筆が進まなくなつてからが本当の仕事だ』という言葉です。

■坂本さんにとって、絵を描く意味とはなんですか。

坂本：ごくあり当たりですが、ものに感動した時、誰かに伝えたい。その表現手段が絵になったということ。口下手、文章下手、演技も下手となればこれしかないでしょう。作品が完成した時の達成感は自己満足以外の何物でもないが、これがあるから続けてこれたのだと思います。自己満足と反省の繰り返しですが、これからもずっと続くでしょう。

■坂本勇さん自筆のアトリエ図



■画家としての生き方について。何か拘りはありますか。

坂本：新しいもの、変わったものなど、時代や流行に惑わされず、自分が観たもの感じたものを信じて描き続けていきたい。

■主体展に関わる事を教えてください。主体美術と係わるようになったきっかけは？

坂本：中央の公募展に出品したいと思い、いくつもの展覧会を観に上野に足を運んでいた頃、地元の主体展出品者の展覧会がありました。その折に当時東京に在住していたが吉江新二先生の抽象作品と初めて出会い、地元出身でこんなすごい作家がいるのかと驚いた。早速、その年の主体展を観に上野へいきました。丁度その年から秋の第1陣として9月1日からスタートした年であり、好印象で出品を決めました。

■主体展の魅力とは？

坂本：会員間の上下がなく、会員は皆平等であること。自由な発言ができる雰囲気があることが魅力です。

■その他のことについて。絵手紙の教室を長年やっておられますか、その関わり方についてはいかがですか。

坂本：絵手紙を始めたきっかけは、個展のお礼状ハガキに手書きの言葉と花の絵を描いて出したところ、「ラブレターをもらった時のように嬉しかった」といわれ、手書きの力を感じました。自分としてはそんなに満足できるようなものでもなかったので、もっと自分でも納得のいくものが描きたい、という思いがあり、会社を退職し、絵の道に入ったのをきっかけに勉強しました。絵手紙も油彩も感動をどう表現し、伝えるかという基本の考え方は共通であり、手軽に入れる絵手紙の世界は、誰にでもできる普段着の芸術だと思います。1枚のハガキでも100号の大作にも匹敵するような、人を感動させる力があると思っていますし、それを目指しています。

(取材を終えて)

坂本氏は根っからの几帳面の性分なのか、アトリエも散らかすわけでもなく絵描きらしくなく綺麗すぎると感じるが、同じくきちんとした「アトリエ略図」とあわせて彼の人柄をよく表していると感じた取材でした。

(取材と文・前田博、まとめ・藤田俊哉)

今号から「ART WAVE」コーナーをリニューアルしました。約20年ぶりに再開した「アトリエ訪問」では全国の会員各氏のアトリエを訪れます。作品同様そのアトリエにも様々な個性があることでしょう。

「各地の美術館から」は日本各地の美術館から東京では観られないユニークな企画展の紹介を、「フォトエッセイ」は絵に限らず身辺の様々な話題を写真と共に自由に綴って頂きます。「私と主体美術」は継続して出品を続けて来られた出品者の方に、主体展への思いを語って頂こうというコーナーです。

その他の時事性のあるトピックスも隨時掲載、これからART WAVEをご期待ください。

お知らせ

「譲ります!」「譲って下さい!」のコーナーを始めます。

「不要なキャンバス譲ります」「大型イーゼル譲っていただけませんか?」「珍しい動物のモチーフ探してます」画材や用具、モチーフや画集など、作品制作の周辺で使うアコレのものの譲渡情報を機関紙部までお寄せください。実名入りで掲示板として掲載します。(注:事務局が譲渡の仲介をするわけではありません)

各地の
美術展
から

中村研一展を見て

福田 加奈子（福岡県）

福岡県立美術館で中村研一没後50年の回顧展を見た。福岡県宗像市出身で昭和期の官展アカデミズムを牽引した画家である。会場で「ガガガーン」ときた絵「コタ・バル」（1942年作）という戦争画である。コタ・バル上陸作戦開始は真夜中のことであったが、月光に照らされた暗闇の中で海辺の砂浜に張り巡らされた鉄条網を切りながら上陸を試み激戦を繰り広げる兵士達の群像、あおむけの兵士の眼光の鋭さに思わずぞっとするほどのたじろぎを感じた。1930年代という時代性に於て、戦争画は軍部のプロパガンダの役割を果たし、国民の戦意高揚を目的に描かれたものである。藤田嗣治、宮本三郎、小磯良平、田村孝之介、小川原脩、他画壇の大家は陸海軍の要請で戦争画を描いた。敗戦後は描いた画家の責任を問う声が上がり、戦争に協力したのは確かに良くない。然しその絵の技術造形性の凄さは別に考えていいと思う。その次に印象に残った絵は、初期の代表作「弟妹集う」（1930年作）の大作である。茶褐色を基調に光と影のコントラストで表現した重厚な作品で、研一の妻とその妹、背後にダンスをする研一の弟・琢治夫妻他、大きなチェロ、蓄音機、テリヤキも座っていて当時に於て恵まれたモダンな生活者の一端がうかがわれる。大作「瀬戸内海」（1935年作）もよかつた。テラスには三人の女性、一人は裸婦である。右の女性の顔は画面から切れて見えない。下の体のみが描かれ、この思いっきりのよさ、大胆さに凄さを感じた。この絵が生きているのは顔が描かれていない故だと思った。又、作陶と絵付けもやり、信楽、備前、志野の茶碗も展示され多才な一面もうかがえた。



中村研一
「弟妹集う」
昭和5年(1930年)
住友クラブ蔵

それと昭和初期の朝日新聞連載の山本有三の「女の一生」の挿絵を描いていたとは知らなかった。その原画の一部も見ることが出来たのは思わず発見だった。

昔「女の一生」を読んだ記憶はあるが、その小説に忠実に描き、線が生きていて思わず懐かしさを感じた。

「桜花風景」のローズグレーと「戦艦伊勢」のグレーの色も好きだった。夫人をモデルにしたオザイ服のピンクがまぶしい「サイゴンの夢」。同じく夫人を描いた「庭にて」のワンピースの赤黒黄色と背後のグリーンの葉が鮮やかに対比され、今も目に焼きついている。今はもう少なくなった矢車草を描いた「花」も好きな花なので印象に残っている。戦前戦後を通して全体的に身近なものへ目を向けた画家だが、戦前は黒・グレー・茶のカラーが多くたが戦後は明るく色彩豊富になっている。大体穏健な作風で、好き好きは別として正確なデッサンと構成力の上手い画家だと思った。

知らないことを知り、知らないものを見て心に渦巻くものをつかみ、あしたに向かって「しゅっぱ～つ」

フォト・
エッセイ

機械式フィルムカメラで遊ぶ — 無用の用 —

渡辺 良一（北海道）



目覚まし時計の遠慮がちな音で目を覚ます。眠い目をこすりながら、家人に気を使いゴソゴソと65年前に製造された機械式フィルムカメラを手に取る。晴れか曇りの予想をたよりに大雑把に絞りとシャッタースピードを確認する。

水を飲み軽いウォーミングアップ、カメラを鞄に入れ、玄関を静かに出て。朝の新鮮な空気が心地よく肺に満ちる。いつものコースへ、途中ウォーキングをしている人と出会えば軽く会話を交わす。

道東の人口2万弱の小さな町、往復1時間30分程度の散歩、いつも見慣れた光景だ。日の出、光の移り変わりの時、「何ものか」は解らない光景に出会う事がある。立ち止まりその光景の周りをウロウロする。ファインダー越しに見た光景と対話しながらレンズの距離を合せ、絞り、速度を微調整する。再び何かを感じればシャッターを切る。シャッターを切るまでの時間が、私にとっての創造的時間で心地よい遊びでもある。

散歩に持ちだす事が多い機械式フィルムカメラにライカIIIFがある。バルナックライカと呼ばれるものである。手のひらに収まる精密感と形。また独特の操作方法も魅力的で満足感がある。

他にも機械式フィルムカメラを所有しているが、どれも個性がある。機械式フィルムカメラのもう一つの魅力は物としての存在感があり、遊び心を満たしてくれる。

男の子は対物志向が強いとイギリスの発達心理学者サイモン・バロン＝コーエンが述べているが、確かにカメラを眺めている還暦を過ぎた私は幼い男の子の目になっているのかもしれない。

撮り終わったフィルムは5本たまたらインターネットを利用して現像店へ送る。たまるのに数ヶ月かかる時もあり、何を写したかをすでに忘れてはいる、いい加減である、それがまたいい。

送られて来た現像フィルムをパソコンに取り込みポジの画像を見て「あれ?」「ほー」という新たな「何ものか」との出会いが楽しく面白い。出来上がった写真は他者と比べる事もなければ比べられる事もない、まして比べた上で優劣をつけることに意味はないと思っている。これも遊びである。

テーマが決まって出来上がりを急ぐ写真を撮るのが目的ならデジタルカメラに優るものはない。だからこそ遊びとしての機械式フィルムカメラの心地よい距離感が自分に合っている。いつしかフィルムも手に入らなくなる時が来るのかもしれない、その時まで私の遊びは続くだろう。

老子の「無用の用」という言葉を胸に、今日も遊び、楽しむためにカメラをバックに入れ朝の散歩に出かける。

「私と主体美術」

石田 悅子（山梨県）

1985年～2017年まで32年間主体に応募してきました。兄の知人であった吉井忠さんが所属されている主体を紹介してもらったことがきっかけです。1985年から2011年までの25年間に落選19回、入選は6回のみでした。2011年からは何とか入選できています。落選通知はつらく毎年涙しました。

そのうち落選が当たり前になり、ほぼ年中行事のように9月の主体展後、キャンバスの下塗りに取りかかり制作し、そのまま主体に応募してきました。

高校から美大を目指し何とか入学でき、兄2人と私の3人で東京での下宿生活を始めました。16畳位の細長い部屋をカーテンで仕切っての生活でした。兄の影響もあり学生時代は社研に入り、60年安保のデモ等の明け暮れの毎日でした。広島の母からの苦しい家計の中からの毎月の仕送りは有難いものでした。今思えば親の気持ちを顧みず、画業の勉強をおろそかにしていたことを自分に恥じています。

卒業し絵の才能に自信がなかったので、暮らしの安定のある教員の道を選び65歳まで43年間仕事をしました。この間は仕事だけで精一杯でしたが春、夏、冬のまとまった休みに1人でスケッチに出かけるのが最大の楽しみでした。気に入った場所でのスケッチは何ものにも代えられない喜びでした。宿での風呂上りのビールは最高に美味でした。さらに次のスケッチ旅行の計画をえがく事で仕事にも頑張りました。又月2回の裸婦のクロッキー会も楽しみでした。

20数年前に東京から山梨へ移住しました。西に甲斐駒ヶ岳、北にハケ岳が家の前にそびえています。当時は毎朝この山々をスケッチしていました。今も変わらず甲斐駒ヶ岳とハケ岳は素晴らしい姿で1年中私を見守ってくれています。山々に癒されて生きていますが、今だにこの美しい山に感動する気持ちを納得のいく作品に代えることはできないのです。

佐藤 一男（秋田県）

私は中央展に出品することなど考えてもいませんでした。しかしながら主体美術、自由美術、日本美術会のアンデパンダン展などには興味を持っていましたから、何度か見に来ました。秋田での自由美術会は会員も多く活動も活発でしたが、地元の主体美術についてはよく知りませんでした。

退職後、加入した年金者組合の書記長が富樫さんでした。秋田の主体美術の活動を紹介され、7、8名の会員がいて、毎年展示会を開いていることを話されました。木村栄治さんや他の皆さん秋田での活動を知った頃に、私にも出品してみたらと誘われました。

私は当時、秋田美術作家協会展に出品していましたので少々戸惑いました。秋田主体美術作家展に出品すると中央展につながるので即答できなかったのです。そのころ年金者組合に絵画サークルを作るために、富樫さんより手当てや当分の間の指導者をお願いされるなど忙しくしていました。

平成17年秋田主体美術作家展へ出品しました。が、中央展へは出せませんでした。50号で描いた作品だったので、せめて100号はあった方がよいと言われたのです。主体美術の厳しさがわかりました。

富樫さんは「とにかく絵は手抜きせず、思ったことを最後まで追及する作家精神を持て」と、この事を心に刻みながら制作しています。

さて、主体美術についての感想です。戦前の国家主義、軍国主義時代に芸術創作活動を貫き通した作家たちの精神を受け継いでいることで

主体展との出会いは何だったのか。またこの展覧会の魅力とは…？これまで継続して出品を続けて来られた方に「私にとっての主体展」について、それぞれの思いを綴っていただきます。

朝目覚めたときに山を見ると、東京でのアパート暮らしから思い切って山梨の田舎へ引っ越してきて本当に良かったなーと今でも思います。作品が増えたので、倉庫と展示スペースを別棟に作り少しほっとしたところです。あちらこちらへ旅行して気ままにいろいろ見たり、スケッチしたい気持ちもありますが、なかなか実行できません。

主体への応募はいつまで続けられるかわかりませんが、山々に囲まれたこの地で何らかの制作は続けていきたいです。

絵を描くことを応援してくれた2人の兄もすでに亡く、姉も入院しています。私の周りの近しい人がだんだん少なくなっていました。易きに流れ厳しさを追及しない情けない自分にこれからできることは、やはり絵を描き続けることしかないと思っています。



谷川岳(1999.12)

す。ちなみに秋田では藤田嗣治が、秋田に縁の作家として取り上げられ、美術史上も権威ある人物とみられています。その例として秋田県立美術館の中心に据え、展示されている『秋田の行事』があります。この大画面に描かれている情景について私なりの感想を述べれば、「秋田を思い短時間で仕上げたとしても、真実の生活感や実在感が弱いのでは？」と思います。それよりも藤田の戦時中の作品、『玉碎画』に対して強く疑問を抱きます。藤田嗣治の戦前の活動については看過できません。戦争画を描かなかつた作家を基礎として、今日の主体美術があるのでは？ それから「作品に金・銀の賞の札をぶら下げる権威的な展覧会ではない」と、富樫さんがよく話してくださいました。

富樫さんを偲び、富樫さんの言葉を忘れず、これからも出展したいと思っています。



「日影の歩行者」(F100)
第53回主体展出品

展覧会記録

2018年2月～2018年8月末

■白黒12+1展（長沢晋一他）
2月6日～2月17日
アートギャラリー月桂樹（埼玉県坂戸市）
■「アトリエのときへ」
(寺田政明、吉井忠 他)
2月6日～3月25日
豊島区立郷土資料館
■岩見健二油絵展
2月7日～2月13日
日本橋三越本店館6階美術特選画廊
■呼展（河西恭子 他）
2月12日～2月17日
Gallery風（銀座8）
■第24回 櫛の会展（石井晴子 他）
2月12日～2月17日
ギャラリー暁（銀座6）
■横大路綾乃展
2月16日～2月26日
画廊珈琲孔雀荘（広島県尾道市）
■2018新春初午ARTISTS展
(柏木喜久子 他)
2月19日～2月24日
GINZAギャラリーアーチストスペース
(銀座6)
■神宮美術館 特別展「語」（中村輝行 他）
2月23日～3月21日
神宮美術館（三重県伊勢市）
■東京←沖縄（寺田政明、吉井忠 他）
2月24日～4月15日
板橋区立美術館
■現代絵画シリウス展（長沢晋一 他）
2月26日～3月4日
ギャラリー暁（銀座6）
■2018ミニミニ100選展
(柏木喜久子、長沢晋一 他)
3月5日～3月10日
ギャラリー暁（銀座6）
■藤田俊哉展
3月6日～3月11日
ギャラリーアーチストスペース2F（京都市中京区）
■小林惇子展
3月6日～3月11日
ギャラリーアーチストスペース1F（京都市中京区）
■福田玲子個展
3月12日～3月17日
光画廊（銀座7）
■イブ達の物語展VI（柏木喜久子、尾川和 他）
3月12日～3月17日
GINZAギャラリーアーチストスペース（銀座6）
■視点×鼎の眼（山本靖久 他）
3月12日～3月18日
あかね画廊（銀座4）

*展覧会案内状を機関紙担当（山田）、ホームページ担当（長沢）にお送りください。（会員・出品者問わず掲載いたします）

■弥生の空に（井上樹里、山本靖久 他）
3月12日～3月24日
始弘画廊（港区南青山5）
■第52回主体美術中部作家展
3月13日～3月18日
東松会館ぎゃらりー（名古屋市東区）
■長沢晋一展
3月16日～3月29日
ギャラリー サテリット
■第8回輪展（長沢晋一 他）
3月19日～3月24日
K's Gallery（銀座1）
■第46回主体美術武蔵野作家展
3月27日～4月1日
埼玉県立近代美術館地階一般展示室
■菅原温子展
3月27日～4月1日
Gallery 美庵（銀座8）
■松尾陽子展
3月31日～4月2日
ギャラリー&工房ボラボラ
(京都大徳寺町屋)（京都市北区）
■大口満絵画展
3月31日～4月8日
大嶋画廊2階ギャラリー（新潟県上越市）
■小菅光夫絵画展
4月1日～4月8日
内田家住宅（国指定重要有形文化財）
(秩父市蒔田)
■11の指標展（長沢晋一 他）
4月2日～4月7日
画廊るたん（銀座6）
■車崎典子個展
4月5日～4月10日
ドウ（doux）画廊（京橋2）
■九名による絵画展（齋藤典久 他）
4月8日～4月14日
ゆう画廊（銀座3）
■第50回主体美術神奈川作家展
4月10日～4月15日
横浜市民ギャラリー（横浜市西区）
■山本靖久展
4月19日～4月28日
画廊 AKIRA-ISAQ（横浜市中区）
■水野博子展 一翔一
4月24日～4月29日
ギャラリーワタナベ（名古屋市中区）
■浜口陽三展 森芳雄の作品とともに
4月27日～7月22日
ミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクション

■生誕100周年記念 小林邦二展
4月28日～5月20日

長野県東御市 丸山晩霞記念館
6月25日～7月1日
東京芸術劇場ギャラリー2
■結城智子展
5月14日～5月20日
あかね画廊（銀座4）
■五月の風展
(柏木喜久子、中村陽子 他)
5月14日～5月19日

GINZAギャラリーアーチストスペー
ス（銀座6）

■HANAフェスタ'18
(松本恵美、鳩貝悦子 他)
5月14日～5月19日

Gallery風（銀座8）
■主体ちば作家小品展2018

5月15日～5月20日
千葉市民ギャラリーいなげ
(千葉市稻毛区)

■續橋守個展
5月28日～6月2日
ギャラリー白百合（日本橋3）
■渡邊俊行個展「祈りのかたち」
5月28日～6月3日

仲通りギャラリー（横浜市中区）
■桐芸会・作品展（種倉紀昭 他）
5月30日～6月3日

好文画廊（日本橋浜町）
■森伊津子小品展
6月2日～6月29日

高橋コミュニティーセンター
市民ギャラリー（豊田市）

■グループ「風」二人展
(塚本照子、田中和枝)

6月2日～6月29日
豊田視聴覚ライブラリー（豊田市）
■2018主体関西作家展（神戸展）
6月5日～6月10日

原田の森ギャラリー（神戸市）
■柴田かよ子展
6月13日～6月18日

ギャルリーくざ笛（名古屋市中区）
■齋藤典久展
6月18日～6月27日

画廊AKIRA-ISAQ（横浜市中区）
■「生誕100年 森川ユキ」
6月19日～7月29日

三条市歴史民俗産業資料館

■アート'95展（荒木篤子 他）
6月25日～6月30日

たましんRISURUホール
■第42回キリスト教美術展2018

（續橋守、中城芳裕 他）
6月26日～7月8日
銀座協会東京福音会センター
(銀座4)

■第25回心に響く小品展
(木村正恒、藤田俊哉 他)

6月26日～7月8日
ギャラリーアーチスト1F・2F
(京都市中京区)

■大野五郎作品展
6月30日～12月2日

北区飛鳥山博物館
■2018主体関西作家展（京都）
7月3日～7月8日

京都府立文化芸術会館
■日本ガラス絵協会会展

（浅野修、中城芳裕、中村輝行、松井
豊、山本靖久 他）
7月9日～7月21日
gallery一枚の繪（銀座6）

■北区モンマルトル美術展
(大野五郎、返町勝治、高澤信、藤田
英子 他)

7月10日～7月23日
画廊山河（北区上十条）
■小林宏至絵画展
7月12日～7月18日
渋谷東急8階美術画廊（渋谷区）
■2018二人展～道～（鈴木遊 他）
7月12日～7月18日

アーチストスペースイワヅチ
(横浜市西区)

■GOCHI展（長沢晋一 他）
7月16日～21日
ギャラリーセイコウドウ（銀座1）
■第24回 時のかたち展

（中島修、結城智子 他）
7月23日～7月29日

横浜赤レンガ倉庫1号館2F
(横浜市中区)

■第51回主体美術秋田作家展
8月2日～8月5日

秋田さきがけ展示ホール（秋田市）
■田中和枝展
8月27日～9月1日

新井画廊（銀座7）

東日本震災遭難児教育資金と 西日本豪雨災害への寄付のお願い

この度の西日本豪雨災害で被災した方々に、心からお見舞い申し上げます。毎年主体展会場で販売している機関紙の売上金は、今回、公益財団法人「みちのく未来基金」と「西日本豪雨災害支援（寄附先は未定）」の両方に全額寄付いたします。今年もご協力をよろしくお願いします。

編集後記

■西日本豪雨災害で被災した皆さんにあらためてお見舞い申し上げます。ニュース映像を見て、東日本の津波災害を思い出させる被害の大きさに、本当に心が痛くなりました。復旧活動はまだこれからですが、国と自治体にはできるだけ早く希望の持てる復興計画を立てていただきたいです。また、風評に惑わされずに、被災していない近隣地域を観光することは1番有力な支援であることも忘れずに。（山田礼二）
■今年から機関紙部も二人体制となり、編集を山田さんと一緒に担当させていただきました。再開した「アトリエ訪問」、多彩な執筆者の「ART WAVE」など盛り沢山の企画で、主体展メンバーのコミュニケーションをサポートできれば…と思います。よろしくお願いします。（藤田俊哉）

2018年第54回主体展

本 展／東京都美術館（上野公園）

2018年9月1日(土)～9月17日(月)16日間

9:30～17:30(最終日は12:00まで)9/3(月)休館

公募搬入／2018年8月22日(水)・23日(木)

東京都美術館パックヤード 地下3階

神 戸 展／原田の森ギャラリー

2018年9月21日(金)～9月24日(月)4日間

10:00～18:00(最終日13:00まで)